

劉希夷「代悲白頭翁」詩私解

A Note on Liu Xi-yi's *Dai Fei Baitou Weng*

川口喜治

KAWAGUCHI Yoshiharu

本稿は、『唐詩選』等のアンソロジーにも採られ、日中において愛読されている著名な作品、初唐の詩人・劉希夷(651～680?、生卒年は下記文献(3)小川環樹『唐詩概説』による。)^(注1)の「代悲白頭翁(白頭を悲しむ翁に代わる)」詩について、従来の解釈、鑑賞を整理しつつ、論者の調べた限りにおいて、これまでに示されていないと見受けられる新たな解釈をいささか試みようとするものである。

まず、以下に、論者が調査した文献を示す。その中には、「代悲白頭翁」詩について直接的に論じていないものも含まれているが、不完全ながらも、劉希夷研究の文献目録として利用価値があるのではないかと考える。なお、論者が目撃していない文献が、特に注釈書等において、これ以外にも多く存在すると思われるが、下記の文献によって解釈の大体の傾向性は明らかになると判断される。

【注釈書等(鑑賞・評語を掲げている主なものを調査対象とした)】

- (1) 簡野道明『唐詩選詳説(上)』(明治書院、1929年10月)
- (2) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』(三好達治執筆、岩波書店、1952年8月)
- (3) 小川環樹『唐詩概説』(岩波書店、1958年9月)
- (4) 目加田誠『唐詩選』(明治書院、1964年3月)
- (5) 斎藤响『唐詩選上』(集英社、1964年6月)
- (6) 星川清孝『古文真宝(前集)上』(明治書院、1967年1月)
- (7) 前野直彬『唐詩鑑賞辞典』(高島俊男担当、東京堂出版、1970年9月)
- (8) 高木正一『唐詩選(一)』(朝日新聞社、1978年2月)
- (9) 中国社会科学院文学研究所古代文学室唐詩選注小組『唐詩選注上冊』(北京出版社、1978年6月)
- (10) 中島敏夫『唐詩選上』(学習研究社、1982年12月)
- (11) 蕭滌非ほか『唐詩鑑賞辞典』(倪其心担当、上海辞書出版社、1983年12月)
- (12) 大上正美『中国古典詩聚花 思索と詠懐 ④』(小学館、1985年2月)
- (13) 松浦知久『校注唐詩解釈辞典』(宇野直人担当、大修館書店、1987年11月)
- (14) 李春祥『樂府詩鑑賞辞典』(嚴徳礼・張錫燕担当、中州古籍出版社、1990年3月)
- (15) 増野弘幸ほか『研究資料漢文学 第三巻 詩I』(明治書院、1993年4月)
- (16) 袁閻琨『全唐詩広選新注集評第一巻』(張連第担当、遼寧人民出版社、1994年8月)
- (17) 陳伯海『唐詩彙評上』(浙江教育出版社、1995年5月)
- (18) 施蛰存『唐詩百話』(華東師範大学出版社、1996年5月)
- (19) 胡漢生『唐樂府詩訳析』(北京大学出版社、1997年9月)
- (20) 村上哲見『唐詩』(講談社、1998年11月)
- (21) 前野直彬『唐詩選(上)』(岩波書店、2000年10月)
- (22) 卞孝萱『中華大典・文学典 隋唐五代文学分典一』(江蘇古籍出版社、2000年12月)
- (23) 石川忠久『漢詩鑑賞事典』(講談社、2009年3月)

【論文】

- (24) 聞一多「宮体詩的自贖」(『当代評論』10、1938年8月。『聞一多全集第三冊』「唐詩雜論」、新華書店、1982年8月)
- (25) 燕明「葬花詩与白頭翁」(『人民日報』1962年4月1日)
- (26) 前野直彬「劉希夷「洛川懷古」詩を読んで」(『吉川博士退休記念中国文学論集』、筑摩書房、1968年3月)。

- 前野直彬『春草考－中国古典詩文論叢－』、秋山書店、1994年2月)
- (27) 西岡弘「年年歲歲花相似－春愁嘆老の文学－」(國學院大學『野州国文学』3、1969年3月)
 - (28) 邵燕祥「兩句唐詩」(『北京晚報』1981年7月21日)
 - (29) 陳文華「劉希夷時代考辨－兼論《国秀集》成書年代」(『光明日報』1983年10月25日文学遺產609)
 - (30) 韓黎範「語新・情深・意遠－讀劉希夷《代悲白頭翁》」((上海)『語文學習』1985-3、1985年3月)
 - (31) 王增文「《劉希夷時代考辨》質疑－与陳文華同志商榷」(河南省社会科学院『中州學刊』1987-4、1987年8月)
 - (32) 東耳「洛陽城東桃李花 飛來飛去落誰家」(新華通訊社『瞭望周刊』1988-10、1988年3月)
 - (33) 許綏「劉希夷与張若虛：唐詩意境的新指向」(湖北省社会科学院『江漢論壇』1994-12、1994年12月)
 - (34) 郭文聊「年年歲歲花相似 歲歲年年人不同－千古詩壇奇聞故事」(中国物資再生協會·徐州國貿稀貴金屬綜合利用研究所『中国物資再生』1995-12、1995年12月)
 - (35) 陳建華「劉希夷詩初論」(湖北省社会科学院『江漢論壇』1996-2、1996年2月)
 - (36) 王珏「劉希夷死因質疑」(河南省社会科学院『中州學刊』1996-6、1996年11月)
 - (37) 王珏「劉希夷和他的詩」(『河南大學學報(社会科学版)』1997-1、1997年1月)
 - (38) 吳功正「黄昏与月夜－談劉希夷、張若虛的詩美特徵」(鳳凰出版社『古典文学知識』1998-3、1998年5月)
 - (39) 後藤秋正・松本肇『詩語のイメージ－唐詩を読むために』第四章人生の軌跡「白頭・白首・白髮」(小松建男担当、東方書店、2000年11月)
 - (40) 岡本不二明「白頭翁の嘆き－「東城老父伝」をめぐる－」(広島大学『東洋古典学研究』13、2002年5月。岡本不二明『唐宋の小説と社会』、汲古書院、2003年10月)
 - (41) 王培紅「生命的焦慮与渴望－論劉希夷的生命意識」(『洛陽大學學報』2002-3、2002年9月)
 - (42) 常平「宋之間与《代悲白頭翁》的著作權案」(山東大學『文史哲』2003-6、2003年11)
 - (43) 岳五九「《代悲白頭翁》賞析」(『安徽水利水電職業技術學院學報』2004-1、2004年3月)
 - (44) 王鮮平「20世紀劉希夷研究綜述」(『平頂山師專學報』2004-3、2004年6月)
 - (45) 白福才「《代悲白頭翁》与《春江花月夜》之比較評析」(『延安教育學院學報』2004-3、2004年9月)
 - (46) 白福才「旧瓶新酒 異曲同工－《代悲白頭吟》与《春江花月夜》之比較評析」(北京文芸出版社『名作欣賞』2005-2、2005年1月)
 - (47) 劉成君「生命的焦慮与渴望－論劉希夷詩的生命意識」(『焦作大學學報』2006-1、2006年1月)
 - (48) 楊真真「揮不去的無奈－《代悲白頭翁》賞析」(四川少年兒童出版社『中学生讀写(考試)』2007-3、2007年3月)
 - (49) 吳功正「唐詩的『路標』 劉希夷、張若虛的詩歌」(深圳證券交易所『深交所』2007-8、2007年8月)
 - (50) 林啓柱「《春江花月夜》与《代悲白頭吟》比較」(四川省作家協會『当代文壇』2007-5、2007年9月)
 - (51) 李巧玲「論劉希夷詩歌的悲劇意識」(『和田師範專科學校學報(漢文綜合版)』2007-5、2007年10月)
 - (52) 彭梅芳「初盛唐文芸審美趨向－以劉希夷詩歌的接受為例」(『華南師範大學學報(社会科学版)』2008-5、2008年10月)
 - (53) 彭梅芳「劉希夷漫遊探略」(黃淮學院『天中學刊』2008-6、2008年12月)
 - (54) 植田渥雄「〔講義録〕『白頭翁』の話」(『桜美林大學紀要 日中言語文化』7、2009年3月)
 - (55) 周吉国「宋之間与劉希夷命案考辨」(吉林省作家協會『作家』2009-10、2009年5月)
 - (56) 韓寧「劉希夷《代悲白頭翁》非樂府《白頭吟》辨」(『內蒙古民族大学學報(社会科学版)』2010-4、2010年7月)
 - (57) 田多瑞「劉希夷詩歌在初唐“不為時重”緣由探求」(『牡丹江師範學院學報(哲社版)』2010-4、2010年8月)
 - (58) 金銀雅「唐代詩人詠《白頭吟》」(中国唐代文学学会·西北大学文学院·廣西師範大學出版社『唐代文学研究』13、2010年9月)
 - (59) 羅浩剛「悲涼而堅定的回帰－劉希夷《故園置酒》賞析」(『文史知識』2010-11、2010年11月)
 - (60) 吳相洲「劉希夷歷史地位重估」(『北京大學學報(哲学社会科学版)』2011-2、2011年3月)
 - (61) 張謙莉「淺析《葬花吟》《灌園叟晚逢仙女》与《代悲白頭翁》的關聯性」(湖南省作家協會『文学界(理論版)』2011-9、2011年9月)
 - (62) 李軍「論劉希夷詩歌的藝術特徵」(『連雲港師範高等專科學校學報』2011-3、2011年9月)
 - (63) 温瑜「伝承与悲劇成因探導－《代悲白頭翁》与《葬花吟》比較」(黑龍江省地方志辦公室·黑龍江省地方史志学会·当代黑龍江研究所『黑龍江史志』2012-3、2012年2月)

- (64) 宋煜「花開自在－浅析《代悲白頭翁》与《葬花吟》二詩」(『遼寧師專學報(社会科学版)』2012-3、2012年6月)
 (65) 胡健「劉希夷詩歌の大衆性研究」(山東省作家協會『時代文学(上半月)』2012-6、2012年6月)
 (66) 徐揚「《代悲白頭翁》的結構主義解讀」(內蒙古師範大學成人教育學院『語文學刊』2012-7、2012年7月)

現存する劉希夷の約四十首^(注2)の詩歌の特徴については、(33)許綏「劉希夷与張若虛:唐詩意境的新指向」、(60)吳相洲「劉希夷歷史地位重估」の指摘を参考にすると、内容としては辺塞詩、閨怨詩、山水詩に優れ、詩型としては古体詩に優れる^(注3)ということになる。

次に、「代悲白頭翁」詩を掲げる^(注4)。

01 洛陽城東桃李花	洛陽城東 桃李の花
02 飛來飛去落誰家」	飛び来たり飛び去り 誰が家にか落つる
03 洛陽女兒好顔色	洛陽の女兒 好顔色
04 坐見落花長歎息」	坐に落花を見て 長く歎息す
05 今年花落顔色改	今年 花落ち 顔色改まり
06 明年花開復誰在	明年 花開き 復た誰かゐる
07 已見松柏摧爲薪	已に見る 松柏の摧れて薪と爲るを
08 更聞桑田變成海」	更に聞く 桑田の変じて海と成るを
09 古人無復洛城東	古人 洛城の東に復る無く
10 今人還對落花風	今人 還た落花の風に對す
11 年年歲歲花相似	年年 歲歲 花相い似たり
12 歲歲年年人不同	歲歲 年年 人同じからず
13 寄言全盛紅顔子	言を寄す 全盛の紅顔子
14 應憐半死白頭翁」	應に憐むべし 半死の白頭の翁を
15 此翁白頭眞可憐	此の翁 白頭 眞に憐む可し
16 伊昔紅顔美少年	伊れ昔 紅顔の美少年
17 公子王孫芳樹下	公子 王孫 芳樹の下
18 清歌妙舞落花前	清歌妙舞す 落花の前
19 光祿池臺開錦繡	光祿の池台 錦繡を開き
20 將軍樓閣畫神仙	將軍の樓閣 神仙を画く
21 一朝臥病無相識	一朝 病に臥して 相識無く
22 三春行樂在誰邊」	三春の行樂 誰が辺にかゐる
23 宛轉蛾眉能幾時	宛轉たる蛾眉 能く幾時ぞ
24 須臾鶴髮亂如絲	須臾たる鶴髮 乱ること糸の如し
25 但看古來歌舞地	但だ看る 古來 歌舞の地
26 惟有黄昏鳥雀悲」	惟だ黄昏の鳥雀の悲しむ有るのみを

(「」は換韻を示す)

人口に膾炙した著名な作品であり、いちいちの解釈は上掲の注釈書等に譲ることとする。

まず、白頭翁が語りかける、第13句「全盛の紅顔子」(第3句「洛陽の女兒」)についてであるが、(13)松浦知久『校注唐詩解題辞典』(宇野直人担当)が、(6)星川清孝『古文真宝(前集)上』の「今が元氣盛りの顔色も紅い若い人。「子」は男子の尊称、または親愛の称。転じて女子にいう。この詩は篇首・篇末とも若い女子について歌っているので、この「子」は女子と見てよいであろう。」という指摘と、(11)蕭滌非ほか『唐詩鑑賞辞典』(倪其心担当)の「前後の文脈により、「寄言全盛紅顔子、應憐半死白頭翁」の二句によって、紅顔の女性の将来が白頭の老翁の今日であることを免れ得ず、白頭の老翁の昔日はとりもなおさず女子の今日であることが疑いもないことを点描しているのである。(在前後的過度、以“寄言紅顔全盛子、應憐半死白頭翁”二句、点出紅顔女子的未来不免是白頭老翁の今日、白頭老翁の往昔実即是紅顔女子的今日。)」との指摘を引いた上で、「いま案ずるに、この詩の題名を「有所思」

に作るテキストがあることは^(注5)、右の説（「全盛の紅顔子」を「洛陽の女兒」とする説…引用者）の妥当性を裏づけている。すなわち、「有所思」という楽府題の詩は、漢代以来、異性に対して胸中の思いを打ち明けることを詠ずるといふ伝統を有しているのである（参照：小尾郊一・岡村貞雄『古楽府』〔東海大学出版会、一九八〇年〕^(注6)）。したがって、この詩についても、ここで不特定多数の、しかも男性に呼びかけていると取るよりは、冒頭から最後まで一貫して一人の乙女に語りかけていると取る方が、「有所思」という題名を与えうる性格をもつこの詩への解釈として、いっそうふさわしいと考えられるわけである。」と指摘するように、全篇、白頭翁が、一人の若い女性に向かって語りかけていると解釈してよいと考えられる。

その上で、この作品は、(2) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』（三好達治執筆）が「最初の二行は映画の一シーンのようである。」とその映像美を指摘し、(23) 石川忠久『漢詩鑑賞事典』が「まず目につくのは対句の妙である。また、一字一字を追ってみると、「花」と「落」が多く使用されているのに気がつく。つまり、「落花」の場面が至る所に挿入されているのである。だから、どの部分を読んでも、花びらの散る場面がオーバーラップされる仕掛けになっている。まるで絢爛たる絵巻物である。人生無常がテーマではあるが、読者はその甘美な調子にただ酔えばよいのだ。」と指摘するように全篇に通奏低音として或いは主題として落花が舞い散り、そこに若い女性が点描される、視覚的な美にうったえた、映像的な、絢爛豪華な作品に仕上がっていると言ってよいであろう。

また上記のことに関連して、(10) 中島敏夫『唐詩選上』は、「詩中「花」は七回。「洛陽（洛城）」は三回。「落」は五回（「洛」と「落」は同音＝四声も等しい）繰り返されている。他に「年」は七回。「人」は三回、等々。密度の濃い律詩とは極めて対照的な作り方がなされていることが窺える。」という指摘は注目すべきものであろう。特に「洛」と「落」の同音を指摘していることは、上に掲げた文献の中では唯一であり、極めて傾聴に値する着眼点であると言えよう。

総じて、作品の大要は、四つの季節がめぐる温帯特有の美的悲哀である「落花」、すなわち今を盛りと咲いた花もやがて散りゆくということに象徴される、人生や栄華のはかなさ、無常を、白頭翁の老残の嘆きに重点を置いて、甘美な抒情の中に歌いあげたものとなっているという点では揺るがないであろう。

ちなみに、(2) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』（三好達治執筆）では「ただ歳々年々人同じからずといい、宛転たる蛾眉能く幾時ぞという、その趣意の、この詩のテーマの痛切なるべきが如くには、これを一読し了った後の後味は何か痛切ではなく、むしろ甘ったるくどこか空々しいのは、裕福な家庭の隠居どもが、愚痴とも繰り返言ともつかぬものを吐きながらそれを楽しんでいるような風体の如くにも推せられる。当時洛陽のある階層の生活雰囲気、そんな気分が日常漂っていた反映であるかも知れない」と鑑賞し、また(54) 植田渥雄「〔講義録〕『白頭翁』の話」が「言ってみれば、それは老人から若者へのメッセージという形で巧妙にカモフラージュされた社会批判、とまではいなくても、バブルのような王朝社会の繁栄に同調することができず、凶らずも落ちこぼれてしまった若者の、アウトサイダーからの苦言であったのではないのでしょうか。」と解釈し、あるいは、(42) 常平「宋之間与《代悲白頭翁》的著作権案」においてこの詩の作者の問題が「著作権」という名目で論じられている。これらは、それぞれの論著が執筆された時代や地域の状況を反映しているように捉えることができ、このような問題意識の興起力にこそ、古典文学の現代性、現代的意義を見て取ることができるのだと、論者は考えている。

さてこの作品は、周知の通り、第11・12句「年年 歳歳 花相い似たり、歳歳 年年 人同じからず」の二句によって著名である。しかしこの句があまりにも著名であり、そこに重点をおいて解釈や鑑賞がなされることが多いため、看過されていた作品の解釈があるのではなからうかという、ささやかな私見を示すことが本稿の目的である。

以下、論者は、私見として、その解釈を紹介したいと思う。

まず第10句の「今人 還た落花の風に対す」に注目したい。この句の意味は、「今人（今の人）」も、第9句の「古人（昔の人）」のように、風に散る花の前に居るということを描いている。それを第9句の「古人 洛城の東に復る無く」、次の第11・12句「年年 歳歳 花相い似たり、歳歳 年年 人同じからず」と合わせて考えると、「今人」がやがて「古人」になるのだが、今の人も、昔の人と同様に、落花の前に居りながら、その落花が無常の象徴であることに気づいていない、と解釈することはできないであろうか。つまり、「年年 歳歳 花相い似たり、歳歳 年年 人同じからず」という無常のことわりがあるにもかかわらず、それに気付かずに、「今人」は「古人」と「還た（やはり同じように）」に「落花」に向きあっているということではなからうか。ここの「還た」には、そのようなことがいにしえより「たちかえって繰り返されてきた」という意味があると考えたい。そして落花が象徴する無常性に老残の身となった今気づき、その嘆きを若い娘に語っているのが、白頭翁なのである。さらに言うならば、

後にも述べるが、後半に表現される「半死の白頭翁」は、「半死（死にかけ）」という点で、もはや「今人」ではなく、「古人」とほぼ同様の立場に立っていると思われるのである。つまり、第10句は、今の人も、いにしえの人、そしてかつての翁がそうであったと同様に、落花が無常の象徴であることに気づかずにその前に立っている、というふうには読むこともできないであろうか。

また、この第10句は、第3・4句「洛陽の女兒 好顔色、坐りに落花を見て 長く歎息す」と同様の場面を、一句にまとめて、古今の対応という視点から描いたと考えられる。次にこの第3・4句について考えてみる。

ここでまず、第3・4句には、異文があるので、主要なテキストの詩題と当該二句を見ておく。

『宋之間集』^(注7) 卷1-21b:「有所思」「幽閨女兒惜顔色、坐見落花長歎息。」

『搜玉小集』^(注8) (p.998):劉希夷「代白頭吟(或刻宋之間集)」洛陽女兒惜顔色、行逢落花長歎息。」

『文苑英華』^(注9) 卷207-2b:劉希夷(文粹作宋之間)「白頭吟」「洛陽(一作幽閨)女兒好顔色、行逢落花長歎息。」

『唐文粹』^(注10) 卷18-12b:宋之間「有所思」「幽閨兒女惜顔色、坐見落花長歎息。」

『樂府詩集』^(注11) 卷41-2b:劉希夷「白頭吟」「洛陽女兒惜顔色、行逢落花長歎息。」

『唐詩紀事』^(注12) 卷13-2b「劉希夷」:「悲代白頭翁」「洛陽兒女惜顔色、行逢落花長歎息。」

『古文眞寶前集』^(注13) 卷6:宋之間「有所思」「幽閨兒女惜顔色、坐見落花長歎息。」

『唐詩選』 卷2^(注14):劉希夷「代悲白頭翁」「洛陽女兒惜顔色、行逢落花長歎息。」

『唐音統籤』^(注15) 卷45-8b:劉希夷「代悲白頭翁」「洛陽兒女惜顔色、坐見落花長歎息。」

『全唐詩』 卷20 (1-p.247):劉希夷「白頭吟」「洛陽女兒惜顔色、行逢(集作坐見)落花長歎息。」

『全唐詩』 卷51 (2-p.630):宋之間「有所思」「幽閨兒女惜顔色、坐見落花長歎息。」

『全唐詩』 卷82 (3-p.885):劉希夷「代悲白頭翁(一作白頭吟)」洛陽女兒好顔色、坐見(一作行逢)落花長歎息。」

第3句「幽閨」と「洛陽」については、前掲(10)中島敏夫『唐詩選上』の指摘にあったように「落」と同じ音を持つ「洛陽」「洛城」の重層的な繰り返しの効果を考慮して、「洛陽」とするのに従うのが適切であろう。「女兒」「兒女」については、『漢語大詞典』は、前者の意味として「猶言女子。…後多指年輕的未婚女子。」を掲げ、後者は「指青年男女。」「婦人;女子。」を掲げており、これに従えばともに成人女子を表わす意味を持つことになるが、特に前者について『詞典』は、この詩の登場人物としてふさわしい「若い未婚の女性」の意味を掲げているので、底本(『全唐詩』)どおり「女兒」とする。次に「惜顔色」「好顔色」であるが、次の第4句に「長く歎息す」と嘆きを表わす表現があり、この嘆きを強調する意味で、ここで「惜しむ」とするよりは、「美しい」という意味の語「好」を配置する方が効果的であると考えられる。

さて「坐見」「行逢」であるが、論者は、先に述べた私解に関連して、「坐見」を支持したい。洛陽の若い女性が「長く歎息す」理由は、次の第5・6句にあるように「今年 花落ち 顔色改まり、明年 花開き 復た誰かいる」と、花が開いて散る季節が来る度に歳を重ね若さが失われ容貌が衰えてゆく無常を感じてのことではあるが、若い女性がそのことを「切実に」悟っているのではないと思う。若い女性は、第10句の「今人」の中のひとりであり、彼女が、第3句では、第11・12句の「年年 歳歳 花相似たり、歳歳 年年 人同じからず」に象徴的に表現される無常のこたわりを「坐に(なんとはなしに)」感じているとする方が、後半の、無常のこたわり、老残をまさにこの時に身をもって体験する白頭翁の若い娘に対する人生訓的な語りかけと対照的になり、作品のアクセントをつける意味でも、面白いと思われる。「行ゆく逢う(歩きながら出会う)」でも、「なんとはなしに」のような意味を取ることができようが、左記のような理由によって、ここは「なんとはなしに」を明確に表現する「坐見」のテキストを採用したい。さらに言うならば、この時、若い女性は第5・6句に描かれることをただ漠然としか理解できておらず、落花を見て「坐に(なんとはなしに)」嘆息しており、そのような何やら得体の知れない嘆きの正体を、白頭翁によって、次の第5・6句以後で解き明かされていると読むことはできないであろうか。また敢えて別解を述べるならば、ここで若い女性は、ただ単に散る花を惜しんでため息をついているだけかもしれない。つまり第5・6句が、「長く歎息す」の漠然たる理由でもない。そのようなある意味無垢な若い女性に対して、花が散ることが象徴する無常の意味を、第5・6句以後で、白頭翁がとくとくと言いつけさせているという読み方も可能ではなかろうか。押韻の視点から見れば、第3・4句の二句だけで同じ韻の段落となっていることから、そのように判断することもできるだろう。このように考えると、この若い女性が、今は漠然としか或いは全く理解できないだろうが、年老いた時に落花を見て、無常のこたわり、老残の悲哀を「なんとはなしに」「理由もなく」感じるのではなく、切実に体験するであろうという含意も、一層強くなり、作品に深みが出てくると判断される。またそうで

あれば、第13・14句の「言を寄す 全盛の紅顔子、応に憐むべし 半死の白頭の翁を」という、白頭翁の若い女性に対する呼びかけが、人生訓的な注意を喚起することばとして、より引き立ってくるのだと考えられる。

次に作品の後半部分を見てみる。

私が注目したいのは、第16・17・18句「伊れ昔 紅顔の美少年、公子 王孫 芳樹の下、清歌妙舞す 落花の前」である。この部分は次の第19・20句「光祿の池台 錦繡を開き、將軍の樓閣 神仙を画く」とともに、白頭翁が、「紅顔の美少年」なりし頃の楽しく豪勢な春の宴の歡樂を回想する場面であり、このシーンは、一見過去の華やかさだけを描いたように見て取れるが、「落花の前」に重点を置けば、別の捉え方ができるように思われる。

すなわち右の如くである。「落花」は、「青年の時の翁」にとっては「清歌妙舞」に色どりを添える華やかなものにすぎなかったのであるが、全篇を通して考えると、「現在の翁」にとっては、無常のことであり、人間の生が老残へと向かうことの象徴として描かれている。そして当時の若い盛りの翁は、その若さと快樂にひたるが故に「落花」が象徴する無常性に気付かなかったが、老残の身となった今はじめてそのことに気付いた。換言すれば、白頭翁は、宴の楽しみを満喫する青年の頃すでに、ほかならぬ自分が、「落花」の前にいた、つまり年老いるという無常のことにさらされていた、支配されていたのだということに気付いたということである。

ここに、白頭翁がそのことに気付いたことによる一種のおののきのような感情を読みとることができないであろうか。そしてそのおののきを、さりげなく、あるいは巧みに表現しているのではなかろうか。三好達治にちなんで、論者がこの第16・17・18句を映像化するならば、全体を白黒あるいはセピア色にし、落花だけに鮮やかな色彩をつけて画面いっぱいに散らせたいところである。

またこの私解のように、明確に述べているわけではないが、(7)前野直彬『唐詩鑑賞辞典』(高島俊男担当)には、「詩はここで一転して、今をさかりの若者と半死の老人とを対比させてみる。まったく対照的なようだが、実はこの老人もついこの間まで華やかな生活をおくった若者だったのだ。ということは、今の若者も、あつというまに、この老人のようになってしまうということなのである。年をとり、病の床に臥す身となってみると、もはや一人の友人知己もない、たのしいあそびは、すでに他の人々のものになってしまっている。」とあり、如上の私解を支持してくれる鑑賞であると思われる。

最後に「代悲白頭翁」詩に対して論者が感じる不気味さについて述べたい。まず(26)前野直彬「劉希夷「洛川懷古」詩を読んで」を参考にする。この論文は、次の作品^(註16)を論じたものである。

萋萋春草緑、悲歌牧征馬。行見白頭翁、坐泣青竹下。感歎前問之、贈予辛苦詞。歲月移今古、山河更盛衰。晉家都洛濱、朝廷多近臣。詞賦歸潘岳、繁華稱季倫。梓澤春草菲、河陽亂華飛。綠珠不可奪、白首同所歸。高樓倏冥滅、茂林久摧折。昔時歌舞臺、今成狐兔穴。人事互消亡、世路多悲傷。北邙是吾宅、東嶽爲吾鄉。君看北邙道、鬪饑縈蔓草。芳□□□□，□□□□□。碑塋或半存、荆棘斂幽魂。揮涕棄之去、不忍聞此言。

詳しくは前野氏の論考に譲るが、前野氏は次のような驚嘆すべき指摘をされている。「(第)23(句)の北邙は、昔から何度も詩にうたわれた、洛陽の北方の墓地である。(第)24(句)の東嶽はすなわち泰山で、死者の靈魂の集まる所と信じられていた。そこを「吾が宅」「吾が郷」と称する「白頭の翁」は、(第9句「晋家 洛濱に都」する時代の第6句「辛苦の詞を予に贈」くった)西晋の人が化した幽鬼でなければならぬ。」(括弧内、引用者)。つまり「洛川懷古」詩の「白頭の翁」は「幽鬼」であるということである。この指摘から「代悲白頭翁」詩を照射すれば、「代悲白頭翁」詩の白頭翁は「幽鬼」ではなくとも「半死(死にかけ)」の存在、つまり「幽鬼」に、換言すればすでに指摘したように「今人」ではなく「古人」に、ほぼ近い存在となる。ここから一見華やかな作品に潜む不気味さを、読み取ることもできるのではなかろうか。なお「半死」が名詞を修飾する詩語としては、これ以前に、梁の庾肩吾の春を歌った詩に「桃紅柳絮白、照日復隨風。……水映寄生竹、山橫半死桐。(桃紅にして 柳絮白し、日に照り 復た風に隨う。……水に映ず 寄生の竹、山に横たう 半死の桐)」^(註17)があるが、人を修飾する例は劉希夷詩が初めてのものである。

これと関連して、「代悲白頭翁」詩とともに『唐詩選』に採られる劉希夷の代表作「公子行」詩は、貴公子と遊女の、人生の榮華ははかないが二人の愛は永久のものであることを歌った作品であるが、その末尾は、「百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵。(百年同じく謝す 西山の日、千秋 萬古 北邙の塵)」^(註18)となっている。「北邙」は上に引いた前野氏の指摘通り、洛陽の北にあった山で、陵墓として古来著名な地。この二句は、死後の愛を誓う言葉として、

人生百年の後、陵墓の「塵」となっても永久にそいとげようという愛の堅固さを強調したものではあるが、論者は、人間の存在が「塵」に帰すという点において、不気味な雰囲気を感じているように感じられる。なお詩語としては「北邙（芒）塵」と熟すのはここが初めての用例のようである。同様に、若い女性が出征した男性を思う中で容貌が衰えてゆくという無常観を歌う「春女行」詩の末尾も「但看楚王墓、但有數株松（但だ看る 楚王の墓、但だ数株の松の有るのみを）」^(注19)と、楚王の陵墓の数本の松という、いわば不気味な情景が描かれている。そのような視点で見れば、「代悲白頭翁」詩の末二句「但だ看る 古来 歌舞の地、惟だ黄昏の鳥雀の悲しむ有るのみを」も、「公子行」詩、「春女行」詩と同様に人間が存在しない情景を描いており、単に時の流れを表現する以上の、寂寞とした薄気味悪さ感じ取れないわけではなからう。

さらに(10)中島敏夫『唐詩選上』は「この劉希夷の詩は楽府（「董嬌饒」。注6参照…引用者）の言葉を踏まえて詠まれているが、単にそれだけのものか、あるいは、唐代において「洛陽城東」といえばその古の漢の洛陽城のあった方角にあたり、それが意識されていたかどうか。漢が亡んだのは、当時を遡る四、五百年昔である。「古人復た洛城の東に無く…」の句にはそのような意識が流れているのかもしれない。」と述べる。この指摘を参考にすると、白頭翁は滅亡した漢の世の洛陽城の情景を唐の洛陽に重ねあわせて語っているとも考えられ、そうならば、「洛川懷古」詩の白頭翁に似て、いっそう不気味な存在となるのではなからうか。また「代悲白頭翁」詩が、中島氏の指摘のように漢の洛陽城を意識しているとすれば、劉希夷に少し先じる詩人・盧照鄰（およそ634～683、生卒年は(3)小川環樹『唐詩概説』による。）の手になる漢の長安城を舞台とした「長安古意」詩の末尾に「節物風光不相待、桑田碧海須臾改。昔時金階白玉堂、即今唯見青松在。寂寂寥寥揚子居、年年歲歲一牀書。獨有南山桂花發。飛來飛去襲人裾。（節物 風光 相い待たず、桑田 碧海 須臾にして改む。昔時の 金階 白玉の堂、即今 唯だ見る 青松のみ在あるを。寂寂寥寥 揚子の居、年年歲歲 一牀の書。独り 南山の桂花発く有りて、飛び来たり飛び去り 人の裾を襲う）」^(注20)とあるのと比較した場合（安直な比較であるかもしれないが）、いにしへの都を意識し、栄枯盛衰の無常性を描いた点で同様であっても、「長安古意」詩の最後には、作者盧照鄰に比された揚雄という人間が描かれており、作品末尾で人間の存在を打ち消した「代悲白頭翁」詩の不気味さをより一層感じ取れるのではなからうか。

なお(27)西岡弘「年年歳歳花相似－春愁嘆老の文学－」には「劉希夷の春愁嘆老歌は「代悲白頭翁」詩にとどまらぬこと、すでに「唐詩選」にひかれた「公子行」の詩の存することにより知れるが、「全唐詩」のかれの作には、なお、「春女行」「采桑」「代閨人春日」「洛川懷古」「代秦女贈行人」「故園置酒」などの詩があり、それぞれ「落花」「白頭」「桃李」「歌舞」「飛落」などの語を見ることができる。」とあり、劉希夷は早くから自己模倣をはじめた詩人であったと思しいが、如上の私解を以てすれば、「代悲白頭翁」詩は、「年年歳歳」の二句とともに、自己模倣を超える彼の代表作たるにふさわしいものと位置づけることができよう。

ちなみに、『全唐詩』には、この詩の後に次の逸話を併載する。

希夷善琵琶、嘗爲白頭詠云、今年花落顔色改、明年花開復誰在。既而悔曰、我此詩似讖、與石崇白首同所歸何異。乃更作云、年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。既而歎曰、復似向讖矣。詩成未周歳、爲姦人所殺。或云、宋之間害希夷、而以白頭翁之篇爲己作、至今有載此篇在之間集中者。

希夷 琵琶を善くし、嘗て白頭詠を爲して云う、今年 花落ち 顔色改まり、明年 花開き 復た誰か有る、と。既にして悔いて曰く、我が此の詩 讖の似し、石崇の白首の歸する所を同じうせんと何ぞ異ならんや、と。乃ち更に作りて云う、年年 歳歳 花相い似たり、歳歳 年年 人同じからず、と。既にして歎じて曰く、復た向の讖の似し、と。詩 成りて未だ周歳ならざるに、姦人の殺す所と爲る。或いは云う、宋之間 希夷を害し、而して白頭翁の篇を以て己が作と爲すと。今に至りて此の篇を載せて之間の集中に在る者有り。

つまり、劉希夷はこの「代悲白頭翁」詩を作ったがために、他人によって（本稿冒頭に示した生卒年によれば）わずか三十歳ばかりの短い生を終わらされたのだという。「代悲白頭翁」詩に、多くの鑑賞者が指摘する甘美な味わいとともに、論者がおののきの感情、不気味な雰囲気を感じるのは、この逸話と通底するのではなからうか。あるいはこの逸話が論者にそのような感傷、鑑賞をもたらしているのではなからうか。

【注】

- (1) のちに第3・4句のテキストの異同を論じた部分で示す通り、本作を宋之間の作とするものもあるが、ここでは、一般的な説に従い、劉希夷の作とする。
- (2) 『全唐詩』（中華書局、1960年4月、以下同じ）と陳尚君『全唐詩補編』（中華書局、1992年10月）による。
- (3) 前者には「劉希夷今存詩作僅三十余篇，從題材上看，主要是從軍、閨情之作，從体式上看，則大多為古体歌行，詩風表現或慷慨沈重，或哀怨悲苦。」とあり、後者には、「其表現辺塞題材の樂府詩写得場面生動，氣勢宏偉，骨力適頸。……劉希夷的山水詩也写得非常成功。如《嵩岳聞笙》就同時體現了興象玲瓏和神采飄逸兩個特点：……。劉希夷樂府詩写得極其自然本色。劉希夷詩多為表達閨情的樂府。」但し、詩風について、前者の「或慷慨沈重，或哀怨悲苦（激越で重々しいか、あるいは、かなしみうらみくるしむものである）」だけにとどまらないことには注意すべきであろう。
- (4) 『全唐詩』卷82・3-p.885による。
- (5) 詩題については、(注1)同様、第3・4句のテキストの異同を紹介する箇所を参照。また詩題については、(52)韓寧「劉希夷《代悲白頭翁》非樂府《白頭吟》辨」が、「至此，可以对《代悲白頭翁》詩的題名問題作一個推論：此詩在創作之初可能是一首無題詩，或者是失題詩。因唐代文献中其収録情况已有多種，《搜玉小集》的《代白頭吟》，《大唐新語》的《白頭翁詠》，以及《本事詩》的不言詩名。而這樣複雜的題名収録情况可能是編選者對一首無題詩擅自命名的結果，命名依据是詩歌的內容，詩作吟詠了一位“白頭翁”的今昔变化，所以題名中有了“白頭”、“白頭翁”這樣的字眼。這樣的詩名極易与樂府《白頭吟》相混淆，《文苑英華》未加分辨而歸入樂府，而郭茂倩《樂府詩集》算是以訛伝訛了。」と、本来「無題詩」「失題詩」であったのが、各テキストに収録されるときに、主人公の名称である「白頭（翁）」が詩題に取り入れられ、それが樂府「白頭吟」が混乱された結果であるというような、興味深い指摘をしている。
- (6) 『古樂府』には余説として「この「有所思（おもうひとがある）」はおそらく後漢の頃に歌われていたものであろう。後世、恋愛をテーマとするものの代表的な樂府題となった。そのため多くの詩人がこれにならって擬樂府を作っている。それらを見ると、作者はみな男子であるけれども、たいてい女性の立場になってその恋情を述べている。」とある。また(10)中島敏夫『唐詩選上』は「詩題は、一に「白頭吟」とするテキストもあるが、内容的には樂府の「白頭吟」の流れを受け継ぐものではない、むしろ樂府の「董嬌饒」を踏まえる。これは雜曲歌辭に属する樂府で、後漢の宋之侯の作になり、「洛陽城東の路、桃李路傍に生ず。……花の落つること何ぞ飄颻たる。……秋時自ずから零落するも、春日には復た芬芳たり。何如ぞ盛年去り、歡愛永に相忘らるとは。……」と詠む。」と指摘する。
- (7) 四部叢刊續編本（上海商務印書館、1934年1月）。
- (8) 傅璇琮『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社、1996年7月）。
- (9) 中華書局影印本、1966年5月。
- (10) 四部叢刊正編本（台湾商務印書館、1979年11月）。
- (11) 中津濱渉『樂府詩集の研究』（汲古書院、1977年6月）所収影印本。
- (12) (注10)に同じ。
- (13) (6)星川清孝『古文真宝（前集）上』。
- (14) (1)簡野道明『唐詩選詳説（上）』。
- (15) 上海古籍出版社影印本、2003年4月。
- (16) 『全唐詩』卷82・3-p.883。
- (17) 『藝文類聚』卷3・上-p.43（上海古籍出版社、1965年11月）。
- (18) (注4)に同じ。
- (19) 『全唐詩』卷82・3-p.880。
- (20) 『全唐詩』卷41・2-p.519。